兵庫・赤穂城跡二の丸

1 所在地　兵庫県赤穂市上仮屋字東組
2 調査期間　二〇〇〇年（平12）四月～二〇〇一年三月
3 発掘機関　赤穂市教育委員会
4 調査担当者　中田宗伯・味呑英和
5 遺跡の種類　城郭跡
6 遺跡の年代　江戸時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

赤穂城は、正保二年（一六四五）に常陸国笠間（現在の茨城県笠間市）から入封した浅野長直が、近藤三郎左衛門正純に築城設計を命じ、慶安元年（一六四八）から寛文元年（一六六一）まで一三年を費やして完成させた城である。その縄張は甲州流軍学によってなされたといわれ、本丸と二の丸の関係は輪郭式であるが、二の丸と三の丸は梯郭式に配し、櫓一〇カ所、門一二カ所、枡形五カ所を設けて防備の要としている。なお城の立地は、熊見川（現千種川）が形成した三角州の先端であり、典型的な平城であるとともに、往時は海に面していたので海城とも言える。

（播州赤穂）

この城を築城した浅野家は、元禄一四年（一七〇一）、江戸城中の刃傷事件によって断絶し、その後は永井家を経て森家の居城となって明治の廃藩置県を迎えた。廃藩後に城郭建物も順次取り壊され、城内の大部分は田畑化あるいは宅地化されていったが、一九七一年の国史跡指定後は赤穂市によって指定地内の公有化が図られるとともに、発掘調査と整備事業が進められている。

木簡は、二の丸北西部の池泉を中心とした庭園の下層から検出された素掘りの溝状遺構から出土した。この遺構は、現状では幅五～六m深さ〇・九mを測り、その法面は緩やかな弧を描く。護岸などの施設は持たず、落ち込みあるいは旧流路に若干手を加えたような溝状遺構である。溝内堆積土の最上層付近に植物腐植土層が認められ、この層の上面には椀・箸・下駄・木片などの多量の木製遺物が投棄されており、二点の木簡はこれらの木製品に混じって出土した。植物腐植土は溝が開放状態にあった時期に、底部に形成された滞水堆積物で、この層より上は二の丸造成のために人為的に投入された砂層である。よってこの素掘り溝状遺構は、二の丸造成の過程で埋め立てられたものと推定できる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「〈大石又太良殿参　頼母」　170×29×2　033

(2)　「〈大いしたのも殿御内
おかのとのまいる　木村惣兵衛」　266×23×4　032

(1)は完形品で、上端の左右に切り込みを入れ、下端はやや尖らせる。「頼母」から「大石又太良」へ宛てた木簡である。「頼母」とは大石内蔵助良雄の大伯父にあたる大石頼母助良重のことである。家老職にあった頼母助は藩主浅野長直に特に重用され、二の丸内に唯一屋敷を下賜され、その娘を妻に娶った。「大石又太良」は頼母助の早世した男子「又太郎」と推定される。

(2)は「木村惣兵衛」から大石頼母助屋敷内の「おかの」に宛てた木簡と推定される。両名とも他史料で該当する人物を確認することができないので、その詳細については不明というほかない。

今回見つかった木簡は年紀の記載はないものの、その出土状態より浅野長直が赤穂に移った正保二年から赤穂城の完成した寛文元年までにその年代を限定することができる。木簡にはいずれも大石頼母助本人やその屋敷に関連する人名が見られ、二の丸にあった大石頼母助の屋敷から不用になった椀・下駄・箸などの木製品、陶磁器類とともに当時まさに城普請の過程にあった屋敷裏手に投棄された遺物群と考えることができる。

なお、木簡の釈読にあたっては、赤穂市立歴史博物館の小野真一氏のご教示を得た。

9　関係文献

赤穂市教育委員会『赤穂城跡二の丸庭園錦帯池発掘調査概要』（二〇〇二年）

（中田宗伯）

(1)

(2)